起

らかなりや、

〔書言字考節用集八言辭〕舉動タチフルマヒ白集文　舉止同

〔倭訓栞中編十三多〕たちふるまひ　長恨歌の舉止をよめり、たちいふるまひともいへり、起居舉動の意也、又立舞振舞といふも、體源抄にみゆ、

〔竹馬抄〕一人の立振舞べきやうにて、品の程も心の底も見ゆるなれば、人めなき所にても、垣壁を目と心得て、うちとくまじきなり、略下

〔枕草子九〕つぎの間に、ながすびつに、まなくゐたる人々、略中御ふみどもつぎ、たちゐふるまふさまなど、つゝましげならず、物いひえわらふ、

〔書言字考節用集九言辭〕行住坐臥ギヤウヂウザグワ要覽、經律中皆以行住坐臥爲四威儀、　起居動靜キヨドウジヤウ

〔倭訓栞中編二十五美〕みぶり　容儀をいふ、身のふりなり、

〔俚言集覽比〕人のふり見て我ふりなほせ　論語、見賢思齊焉、見不賢而內自省也、

〔倭訓栞中編十五都〕つまはづれ　爪端の義、舉動に就ていへり、俗語なり、

〔類聚名義抄一走〕起音豈ガク　ガコス

〔倭訓栞前編四十五於〕おく略中　起をよめり

〔古事記中垂仁〕故天皇不知其之謀而、枕其后之御膝、爲御寢坐也、爾其后以紐小刀、爲刺其天皇之御頸、三度舉而、不忍哀情、不能刺頸而泣淚、落溢於御面、乃天皇驚起、問其后曰、略下

〔日本靈異記中〕極窮女於尺迦丈六佛願福分示奇表以現得大福緣第廿八

聖武天皇世、奈羅京大安寺之西里有一女人、略中罷家而寐、明日起見于門椅所有錢四貫、略下

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、ならの京ははなれ、此京は人の家まださだまらざりけるときに、西の京に女ありけり、略中それをかのまめ男、うち物かたらひて、かへりきていかゞ思ひけん、時は